

## すべての人に読書の楽しさを



その図書館には、読書を楽しむ人を、あたたかい眼差しで見つめている一人の職員がいます。彼の名は、佐藤聖一さん。彼は、視覚障害者です。

佐藤さんは、埼玉県立久喜図書館で働いています。小学校の先生だったとき、病気になる、突然視力を失いました。

(何も見えない私は、これからどうなるのだろうか。)

仕事も辞めた佐藤さんは、大きな不安から、一人でふさぎこんでしまいました。しかし、くよくよしていても始まりません。視覚障害者として自立するために、家族からも離れ、一人で生活するための訓練を始めたのです。しばらくして、身の回りのことができるようになると、次は外に出て、白い杖を使っての歩行訓練です。バスや電車の乗り降りなど、命の危険と隣り合わせのこともありました。

(ああ、見えていたときは簡単にできたことが、できなくなりました。)

これまで見えていたものが見えない恐怖感に襲われたり、悔しい思いをしたりすることもありました。しかし、一緒に訓練する視覚障害者の仲間と話をしたり、笑い合ったりすると、頑張る勇気が湧いてきました。

(自分が視覚障害者になって、初めてわかったことがたくさんある。みんなはすごいな。目が見えないことでたくさんの苦勞をしているけれど、できることを楽しんでいる。私だって……。)

佐藤さんは一生懸命訓練に励み、一年後には、なんとか自分一人で生活できるようになりました。

(よし。次は、仕事をして、経済的に自立しよう。せっかく働くなら、目が見えない私だからこそできる、社会で人のためになる仕事を探そう。)



県立久喜図書館で働く佐藤さん

そんなとき、視覚障害のある図書館職員から「一緒に仕事をやってみませんか。」と誘われました。読書が好きだった佐藤さんは、図書館で働くことを決心しました。そして、大学に入学して、司書になるための勉強を始めたのです。

しかし、当時は紙の教科書しかなかったので、大学での勉強は、苦勞の連続でした。友達に教科書の内容を点字や録音テープにしてもらい、テストはタイプライターで解答を作成しました。

（視覚障害者が勉強するのは、とても大変なことなんだな。自分で本が読めたらいいのに。）  
勉強の仕方を工夫し、努力を重ね、司書資格を取得することができました。そして、採用試験に合格し、念願の図書館で働くことになったのです。

司書になって、仕事ができることにわくわくしていた佐藤さんでしたが、気がかりなことがありました。当時、視覚障害者が本を読むには、点字本と録音テープしかありませんでした。しかも、佐藤さんのように途中で視力を失った人は、最初から点字ですらすら読書をするのは大変難しいことでした。

（視力が弱い私たちは、読みたい本を読むこともできないのか。）

あるとき、視覚障害のある男性が、初めて図書館の対面朗読サービスを受けにきました。対面朗読というのは、図書館の音訳者が一対一で、読みたい本をその場で読んでくれるサービスです。

「私は視力を失ってから、ほとんどの時間を家で過ごしています。ここで本の朗読をしてくれると聞き、やってきました。初めて好きな本を読めました。家族以外の方が朗読をしてくれました。僕も社会とつながれた気がして、幸せな気持ちです。」

男性の言葉を聞いて、佐藤さんは、胸が熱くなりました。と同時に、新たな疑問も生まれました。（読書をあきらめたり、孤独を感じながら生活したりしている人が、もっとたくさんいるのかもしれない。）

そんな佐藤さんに大きな出会いがありました。東京大学で司書をしていた河村宏<sup>かわむらひろし</sup>さんです。河村さんが開発したデイジー図書は、これまでの録音テープに代わる、世界共通の音声図書でした。そのデイジー図書は、視覚障害者のためのものでした。しかし、コンピュータの進化とともに、河村さんは、誰でも使えるマルチメディアデイジーへと進化させました。音声



録音テープ



### マルチメディアデザイン

音声、文字、画像が同時に再生される。

佐藤さんはまず、図書館職員と一緒に、デジータ点字本などの資料を、多くの利用者に見てもらえる場所に置きました。さらに、図書館職員が参加する研修会などで、講演をしました。また、全国の学校の先生を対象に、展示会も行うようになりました。

(司書や学校の先生にも、様々な読書の仕方があることを知って欲しい。そうすれば、必要としている人や子どもたちに、図書が届くはずだ。)

ある日、佐藤さんの働く図書館に、女の子とお母さんがやってきました。

「娘の音読を家で聞いているのですが、すぐにつかえてしまい、すらすら読めないんです。」

「そうですか。では、ちょっとタブレットに入っているこの教科書を読んでみてください。」

ただではなく、文字と音声と画像が同時に再生できる、電子書籍です。

(これなら、高齢者や、発達障害、知的障害、肢体不自由の人など、今まで色々な理由で読書をあきらめていた人も、本を楽しむことができる。きっとたくさんの人に喜んでもらえるぞ。)

しかし、大きな問題に直面します。せっかく完成したのに、日本では、それを必要としている人たちに、なかなか普及しなかったのです。

(なぜだろう……。)

悩んでいた時、以前対面朗読に来た男性の言葉を思い出しました。

(外に出かけられない障害者もいるはずだ。欲しい情報も手に入らないこともあるだろう。そうだ。障害者だけでなく、もっとたくさんの人に知ってもらえば、使う人が増えるかもしれない。)



デジータ図書と再生機



デイジー図書は今や世界五十カ国以上の国や地域で利用されています。本が自由に読めることは、本当に幸せなことです。でも、まだまだ本を必要としている人がいるはず。読書は、自分の生きる世界を広げ、人生を豊かにしてくれます。全ての人が読書を楽しめるように、これからは私にできることを、一生懸命やっていきたいと思っています。

デイジー教科書を読んだ女の子は、驚いた様子でした。「ママ、これなら今どこを読んでいるかわかるよ。私にも使えそう。」女の子の弾んだ声と、お母さんの笑い声が聞こえました。「今までは、ちゃんと読みなさいと怒ってしまっていました。一生懸命やっていないのだと思ったのです。でも、娘の笑顔を見て、安心しました。こんなよい教科書があるなんて知りませんでした。」

(ああ、今日はなんてよい日なんだろう。)  
佐藤さんは、満面の笑みを浮かべました。



この二次元コードから、佐藤さんのお話の動画を見ることができます。



ユニバーサル絵本。県立久喜図書館では、様々な障害のある子どもたちも楽しめる本も扱っている。